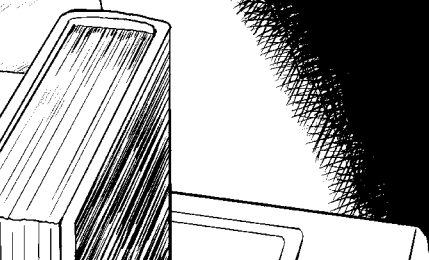
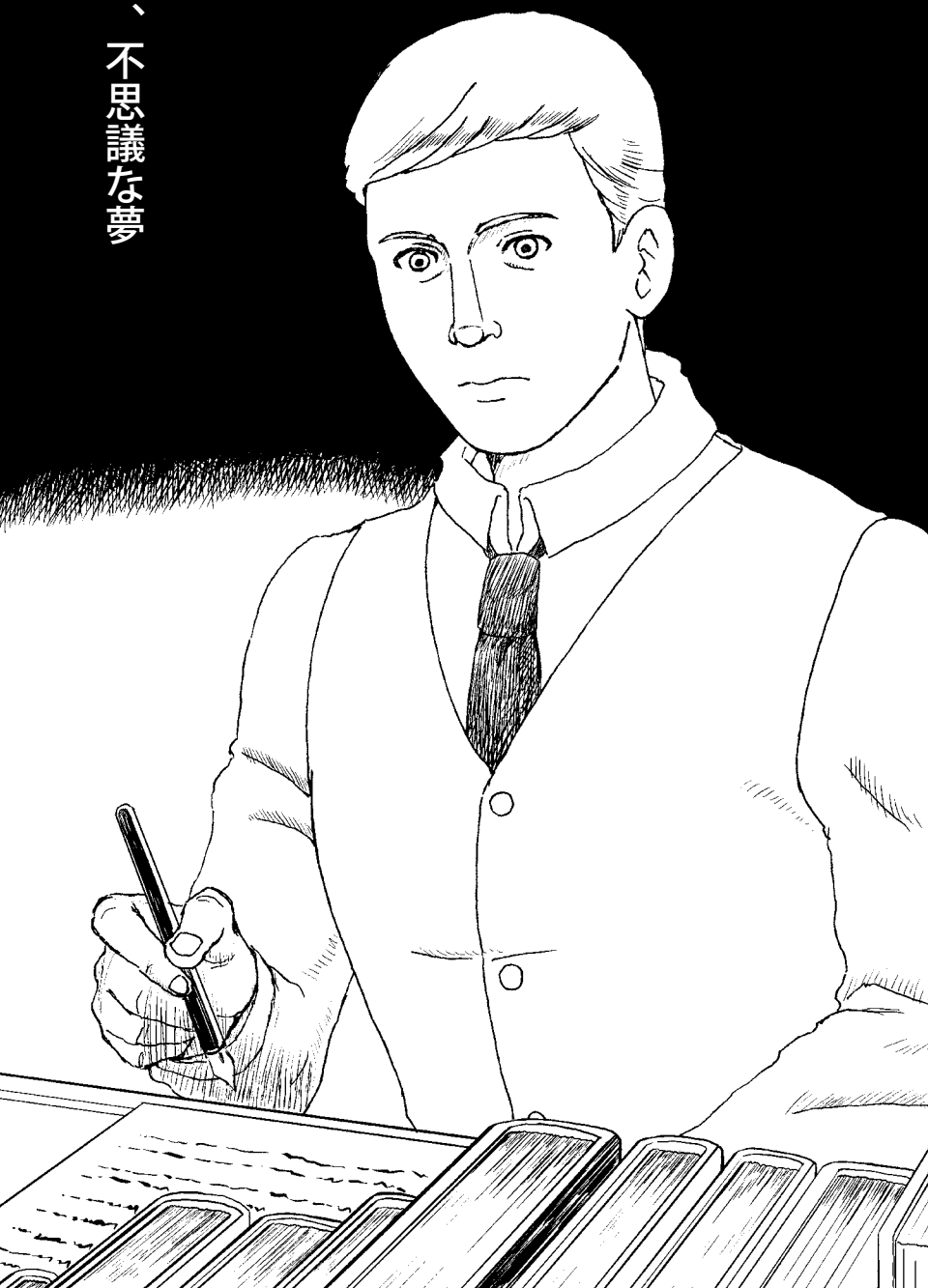


前編

叔父さんの住む霊界



一、不思議な夢



一九一四年一月五日、月曜日、ワード氏の叔父さんは、八十才の誕生日を迎えたその日に亡くなりました。

実は、その一カ月前に、ワード氏は叔父さんの亡くなる夢を、ありありと見たのでした。それは叔父さんの臨終から、お葬式の模様、それに、自分自身が式に参列している姿まで、はっきり見えたのでした。その時の悲しい気持、また、お悔みに来た人達の表情や言葉まで、はっきりと胸にきざみつけられて、覚めてからも消えないのです。

で、そのことを妻のカーリーに話すと、ではすぐロンドンへ行ってみましょう、ということになったのですが、あいにく、カーリーが急病になったので、とうとう行けないままになっていました。

ですから、一月五日の朝、叔父さんの死の知らせを受けると、ワード夫妻はとるものもとりにあえず、ロンドンへ急ぎました。

でも、ロンドンへ着いたワード氏は、何もかもびっくりすることばかりでした。実は、お葬式の模様といい、集った人達の顔ぶれや、挨拶の仕方といい、それに棺に眠ってい

る叔父さんの顔付きまで、夢で見たのとそっくりだったのです。

あまりのショックに、ワード氏はそれから何日も悲しい日を送りました。

ところが、叔父さんの死から一週間目、一月十二日の月曜日、夕方のこと、たまたま母のカーリーと庭に出ていた、五才になる娘のエディーが、急にこんなことを口ばしました。

「あれ、あんな所におじい様が。ほれ、いつもの黒いズキンをかぶつて。あ、こっちへふわふわ降りて来るわ。」

「アラ、ご機嫌ようだなんて、おかしいわ。ホレホレ、もうあんな所で、おじい様ったら、お星様をまちがえて、お花のように摘んでいるわ。」

これは、きつと熱のせいだ、とカーリーは思つて、エディーを部屋につれていつて寝かせました。

ところが、その夜のことです。ワード氏は不思議な夢を見ました。急に、寝室の中がほの明るくなつたと思うと、叔父さんの顔が現われました。それは生きてる時の顔と似

ているのですが、どこか違う。そう、生顔と死顔をちゃんぽんにして、二で割ったような顔です。その叔父さんが口をひらいて、こう言うのです。

「初めは、娘のカーリーに通信しようと、やってみたのだが、あれは鈍感でいっこうに駄目だ。孫のエディーには見えとったようじゃが、あゝ小さくては役にたたん。で、こんどはお前に試してみたんじゃが、お前はテレパシー能力があるとみえて、これこの通り大成功じゃ。」

叔父さんは、嬉しそうにニツコリしました。

「では、夕方、エディーがおじい様を見たと言ったのは、本当だったのですか。お星さまを集めて、花束にしていると聞いたのは。」

「そうじゃ、わしじゃ、本当じゃ。じゃが、星を摘んだのではない。花じゃ、霊界の花は、星のようにきれいだから、うっかりエディーは見違えたのじゃろう。」

「で、叔父さん、貴方は今何処に居られるのです。その霊界とやら、ですか。」

「そうじゃ、そうじゃ。これこの通り、わしは霊界でピンピンしておるわい。」

そう言うのと、叔父さんの顔は、心なしか、生前より若やいで、生き生きと見えました。

「で、そのことじゃ、人は死んでも死なぬということじゃ。わしはこつちの世界へ引越して、初めてそれを知った。で、その喜びを、お前達にも分けてやろうと思つてな。そうじゃ、わしの葬式の日に、お前もカーリーも、すっかりしおれていたな。カーリーのやつ、わしの死に顔を見て、オイオイ泣き出しおつて。そうしたら、お前はハンカチをとり出して、カーリーの手に持たせてやつたな。」

「オヤ、叔父さんは、なぜ、そのことをご存じなのですか。」

「それ、それが、わしが生きておる何よりの証拠じゃ。わしとは、ホレ、今ここに居るこれがわしじゃ。死体は、いわば、わしの脱け殻じゃ。」

「では、カーリーは、その脱け殻に、涙をこぼしていたわけですか。」

「さよう。それが不憫ふびんでな。いや、おかしくもあるし。わしはそばに立っていて、やきもきしたもんじゃ。」

「すると、叔父さんは、お葬式の日のことは、何もかも見ておられたのですか。」

「そう、何もかもじゃ。それに、わしはわしの臨終についても、見て何もかも承知している。いや、それについては、またゆっくり話すでしょう。ともあれ、今日は、お前と通信ができて、まことに満足じゃ。では、次の月曜日を待っていておくれ。それがわしの誕生日で、また命日じゃからな。」

それから、ワード氏はぐっすり眠りにおちたのか、翌朝は、いつものように目が覚めました。でも、頭には昨晩のことが、まざまざと焼き付けられていて、いつまでも忘れられませんでした。